

静岡県立大学短期大学部
研究紀要 14-3 号 (2000 年度) - 5

研究社『英和中辞典』第 3-6 版にみる重要語指定の変遷

石川慎一郎

Word-Grading Seen in the Four Editions of *Kenkyusha's New College English-Japanese Dictionary*

Shin'ichiro Ishikawa

1 はじめに

英語教育における語彙学習の重要性は改めて指摘するまでもない。しかし、修得すべき語彙の具体的な内容については、文部省の指導要領でも一部の基本語を除いて明示がなく、長らくブラックボックスとされてきたのが実状である。こうした状況の中、教育現場は、語彙学習の指針を主として教科書・入試単語集・学習英和辞書などに求めてきた。中でも、教師や学習者が日々の学習活動において身近に触れる機会の多い英和辞書は、とくに大きな影響力を持ってきたと言ってよい。そこで本稿では、代表的な学習英和辞書の 1 つである研究社の『英和中辞典(以下英和中)』を取り上げ、その重要語指定の内容および妥当性がどのように変遷してきたかを検証することとしたい。

2 『英和中』改訂小史

小島(1984:131-145)は、戦後の英和辞書の歴史を、敗戦直後の「混乱期」(1945~50年)、「立ち直りの時期」(1951~59年)、「新しい物への模索の時期」(1960~66年)、「前進と発展の時代」(1967年~)という4つに区分した上で、1967年つまり「昭和42年発行の研究社『英和中辞典』の出版が、英語辞書の新しい時代の幕を開けた」としている。また竹林・千野・東(1992:510)も、『英和中』初版の出版によって「学習英和辞典は新しい時代に入った」と指摘する。『英和中』は、「普通の辞書と学習辞書との2段構え」(2版まえがき)という独創的なスタイルを取ることで、専門家を対象とする大辞典と中学生用の小辞典との間に、「中辞典」というジャンルを開拓し、以後の日本の辞書界に大きな影響を及ぼしたのである。

『英和中』は、1967年の初版以降、67年に2版(用例差し替え版)、71年に3版、77年に4版、85年に5版、94年に6版が出て今日に至る。初期の2つの版は1947年初版の『ポケット英和辞典』の「改訂の代役」として出版されたものであったが、3版において「語彙や語義を増強し

ながら,同時に学習辞書としての性格をさらに強めるという方針のもと,最新の資料を参考にして全面的な改訂(3 版まえがき)が行われ,以後『英和中』は代表的な日本の学習英和辞典の1つとして評価を確立するに至るのである.こうした経緯をふまえ,本稿では3版以降,現行の6版に至る4つの版を対象として,以下,その重要語指定の内容を概観してゆくこととしたい.

3 重要語のランクと指定数

さて,辞書の重要語はランク別に指定されるのがふつうである.『英和中』の場合,3版および4版では,中学と高校の2段階であったが,5版において,新たに大学および一般に相当するランクが新設され,以後は4段階となっている.下表はランクとその指定語数を一覧したものである.

	3版(1971)	4版(1977)	5版(1985)	6版(1994)
中学	中学程度で 修得すべき語 2261	中学基本語彙 2704	中学学習程度の 基本語 1000	中学学習程度の 基本語 1000
高校	高校程度で 修得すべき語 6639	高校基本語彙 6401	高校学習程度の 基本語 1000	高校学習程度の 基本語 1000
大学			高校入試から 大学教養程度まで の基本語 2000	大学入試から 大学教養程度まで の基本語 2000
一般			(上記)基本語に 次ぐ基本語 3000	(上記)基本語に 次ぐ基本語 3000
合計	8900	9105	7000	7000
範囲内 指定語数	148	147	115	114

5版の大学ランクにある「高校入試」という文言は誤解を招きやすものであるが,6版を参照した上で「高校における大学入試指導」の意と判断したい.なお,「範囲内指定語数」とは,今回の調査対象としたサンプル範囲内での指定語の総数である.

4 改訂の詳細

以上の4種の版について単語別に重要語指定の変更状況を調査し,別表のような結果を得た.ただし対象はa-aeのサンプル範囲に限定している.別表中の数字は,初級ランクから順に4(中学),3(高校),2(大学),1(一般),0(指定対象外)の各ランクを示す.同表をふまえて,以下3次にわたる改訂の内容を詳しく概観してゆく.

4.1 4版改訂

1977年の4版改訂に関して,まえがきは,「全般的な改善と充実のために旧版の形式と内容に検討を加えて修正した」とするが,重要語指定に関してとくに言及はない.指定語の総数は8900語から9105語に微増したが,ランク分けの方法にもその内容にも,顕著な変化は認められない.

ただし、指定語の総数は同等ながら、4版の方がより多くを中学ランクに割り当てていることは注目に値する。総指定語数に占める中学ランク語の割合は3版の約25%に対して4版では30%にまで上昇している。このことは、語彙学習に関して4版がより高い水準を初級学習者に求めようとしたことの表れとみなすことができる。

以下、各々の語のランクが「中(学)」「高(校)」「大(学)」「(一)般」「(指)定外」の5段階の中でどのように変化したかを具体的に見ておく。

ランク引き上げ語 2語

administrative(高 外), advice(中 高)

ランク引き下げ語 1語

adequate(高 中)

advice と adequate は4版改訂によって、中高のランクが逆転したわけであるが、これは一般的な理解とは矛盾するものであろう。1億語のデータに基づく British National Corpus (以下 BNC) が提供するオンラインサンプルサーチでも、advice のヒットが 10437 例であるのに対し、adequate はわずか 3571 例に留まっている。こうした細かいランクの変更が、果たしていかなる根拠に基づいているのかは明らかにされていない。

4.2 5版改訂

4版改訂がいわゆるマイナー・チェンジであったとするならば、1985年の5版改訂は、『日本人にとっての英和辞典とは何か』という根本に立ち帰って、全面的改訂(5版まえがき)を施すものであり、重要語指定に関しても、「学習基本語は種々の新しい資料により総点検を行って、...4つのランクに分け、総計約7000語を選定」という新しい方針が打ち出された。

5版改訂では、それまで9105語であった重要語の総数を7000語に削減した。調査範囲内で見ても指定語の総数はそれまでの147語から115語へ20%以上削減されている。加えて、改訂では4段階の細かいランク分けが新設され、それに伴い、ほとんどの語はより上級のランクへと引き上げられることになった。

ランク引き上げ語 133語(以下は3段階引き上げの36語)

abbey, abbot, abdomen, abdominal, abolition, abominable, absurdity, abyss, accession, acclaim, accompaniment, accomplished, accomplishment, accumulation, accurately, accursed, accusation, acknowledgement, acorn, acquisition, acquit, acting, adaptation, adjacent, adjoin, admirable, admirer, adoption, advancement, advent, adventurer, adventurous, adversary, adverse, advertising, adviser (全て高 外)

4版指定語の90%に当たる132語において、何らかのランク引き上げが起こっているが、このうちもっとも極端な3段階の引き上げが行われたのが上に示す36語である。これらがランク引き上げの結果、指定対象から外された原因としては、下記の2つの方針が推定される。

(A) 特殊・難易語の排除

36語の中には、一般的な状況下での使用頻度が少ない特殊語・難易語が含まれていること

に気が付く。これらは, abbey, abbot, abyss, acorn など語の指し示す概念自体が特殊な場合と, abdomen, acclaim, adjacent, adjoin などのように指し示す概念は一般的であるが,同一語義を持つより平易な語(stomach, insist, near, join など)に対して,語としての難易性が高い場合とがある。これらの語に関するランクの引き上げはまずは妥当なものと言える。

(B)派生語の排除

一方,上記 36 語の中でより顕著なものはいわゆる派生形である。

【形容詞・副詞】 abdominal (>abdomen), accomplished (>**accomplish**:高), accurately (>**accurate**:大), accursed (>accuse), admirable (>**admire**:高), adventurous (>**adventure**:高), adversary (>adverse),

【名詞】 abolition (>**abolish**:般), absurdity (>**absurd**:般), accession (>**access**:般), accompaniment (>**accompany**:大), accomplishment (>**accomplish**:大), accumulation (>**accumulate**:般), accusation (>**accuse**:大), acknowledgement (>**acknowledge**:般), acquisition (>**acquire**:大), acting (>**act**:高), adaptation (>**adapt**:大), admirer (>**admire**:高), adoption (>**adopt**:大), advancement (>**advance**:大), adventurer (>**adventure**:高), advertising (>**advertise**:大), adviser (>**advise**:高)

これらの派生形は 24 語に上るが,このうちボードで示した 21 語は基本形の方が指定語に含まれている。つまり,必ずしも低頻度語や特殊語とは言い難いこれらの派生形がそろって重要語指定を取り消された背景には,基本形を重要語に指定した場合,その派生形は対象外とするという改訂方針が存在していたと考えざるを得ないのである。

カウイー(1984:129-31)も指摘するように,辞書においてはしばしば派生形の基本形への繰り込みが行われていることもあり,こうした方針は一見妥当なように思われるが,辞書の語彙指定を語彙学習の指針と考えた場合,ここにはいくつかの問題点が浮かび上がってくる。

問題の 1 点目は,不規則な語形変化をする派生形が学習対象から外れてしまうことである。確かに派生形には,接辞の付加による規則的な変形をするものが多いが,一方で,変形パターンが不規則なものもある。例えば, -tion 接辞を付加するだけであっても,acquire から acquisition の変形を予測することはほとんど不可能であろう。5 版は acquisition を重要語指定の対象外としたが,この措置により,acquire は知っていても acquisition を認識できないという事態の発生が懸念されるのである。

2 点目は,実際の出現形が学ばれなくなるという点である。例えば 5 版は基本形 abolish を重要語指定したために,その名詞形 abolition については指定を取り消しているのであるが,前述の BNC サーチによれば,名詞形が 1158 例のヒットであるのに対し,基本形はわずか 561 例に留まっている。つまり 5 版の語彙指定は,実際のコミュニケーションと矛盾したものになっているのである。頻度が全てではないとはいえ,重要語指定が,実際の出現形から離れることは決して望ましいことではない。

最後に 3 点目は,派生形特有の語義・用法が学習されにくくなるということである。例えば 5 版で指定を取り消された acting は,「行動・演技」などの名詞用法のみならず,形容詞で「代理の」という重要な新語義が生まれている。acting が指定重要語から外れることで,こうした語

義・用法を修得する機会を奪われることになるのである。

さて、以上で概観したように 5 版は「難易語」と「派生形」を中心に大幅なランク引き上げを行ったわけであるが、一方でランクを据え置いた語、さらにはランクを引き下げた語もわずかながら存在する。

ランク据え置き語 14 語

a, able, about, above, across, add, address, aeroplane (中)

ability, absence, accent, adjective, advice, advise (高)

ランク引き下げ語 4 語

ad(外 大), administrative(外 般), adolescence(外 般), acceptable(外 大)

それまでの指定外から大学もしくは一般ランクにまで引き下げられた 4 語のうち、時事英語で頻出する ad および administrative の採用はまずは妥当な判断と言えよう。5 版改訂においては、「新しい資料」をふまえた重要語の見直しが行われたということであるが、ここで言う「新しい資料」とはかなりの部分、時事英語資料を指すのではないかと考えられる。

だが同じ新規指定とはいえ、adolescence の採用には疑問が残る。BNC 検索でもヒットはわずか 460 例であり、当該語をあえて重要語とする必然性は薄いであろう。一方、BNC で 3651 例がヒットする acceptable は、頻度的には妥当な採用であるが、すでに見たように、全般的に派生形を対象外とする中で、なぜ acceptable だけが対象となったのかやはり根拠は曖昧である。

こうして見てくると、5 版改訂に伴う重要語の見直しに関してもっとも混乱を来しているのは派生形の扱いであると言える。語彙の捉え方については、村田年(1997:27-28)も指摘するように、派生形を網羅的に数え上げる word-form 方式と、基本形ですべてを代表させる headword 方式とがある。acknowledge/acknowledged/acknowledgment を別個に見出し語としてあげるなど、基本語彙の扱いに関しては原則的に word-form の立場に立つはずの辞書が、一方の重要語指定においては、基本形で派生形を代表させる headword のアプローチを取ることが大きな矛盾であり、学習者を混乱させる一因と言わねばならない。

4.3 6 版改訂

1994 年の 6 版改訂では、「(前回の)改訂後の変化に対応した語彙語義の増強を基本に、学習辞典と一般辞典とが有機的に結合する英和辞典を編集する」(6 版まえがき)という指針の元、「9 年ぶりの大改訂」が行われたが、重要語指定に関しては「学習基本語の重要な語義には太字を用いて初学者にも検索しやすいようにした」とあるだけで、インターフェースの改良を除いて大きな変更はないようである。事実、4 段階のランク分けも、各ランクの指定語の総数も 5 版と変わっておらず、対象範囲内指定語数も 1 語の減のみである。だが、個々の語の指定状況を見れば、やはりそこには微妙な変更の痕跡が認められるのである。

ランク引き上げ語 5 語

abate(般 外), abhor(般 外), accessible(大 外), adolescence(般 外), adversity(般 外)

ランク引き下げ語 4語

accelerate(外 般),accomplishment(外 般),advertising(外 般),adviser(外 般)

ランク引き上げ語は accessible を除けば頻度が低く,一方の引き下げ語は総じて高頻度となっており,上記の変更は頻度の上ではおおむね妥当なものと言える。しかし,3 次の改訂における各語のランク変更を時系列的に概観するならば,そこに一貫した根拠ないし方針を認めることは難しい。

adolescence	外	外	般	外
accomplishment	高	高	外	一般
advertising	高	高	外	一般
adviser	高	高	外	一般

上記は 3~6 版の指定ランクを通観したものであるが,わずか 30 年足らずの間に当該語の重要度が著しく上下したという事実はなく,このようなめまぐるしいレベルの上下ははなはだ不自然である。5 版でのみ指定されてその後再び指定外となった adolescence の場合,誤った採用を是正した感が強いが,それ以外の 3 語に注目すると,6 版で復活したこれらの語がいずれも派生形であることに気が付く。word form 方式による見出し語提示と head word 方式による重要語指定が根本的に矛盾していることはすでに指摘したとおりであるが,6 版改訂にはこうした過去の重要語指定を見直そうとする動きが部分的に認められるのである。

5 重要語指定の妥当性の変遷

5.1 調査の方法

以下では,3 次にわたる見直し,各版の重要語指定の妥当性にどのような影響を及ぼしてきたのかを,コーパスデータとの対照調査によって計量的に検討する。論者は,石川(2001a)において,時事英語 140 万語,児童文学 120 万語,映画のセリフ 130 万語の各コーパスに基づいてその構成語彙調査を行った。各種のエラーワードや,総出現頻度に対する構成比 5%未満のノイズワードなどを除去する電算処理の結果,a-ae という本稿のサンプル範囲に関しては,時事英語で 124,児童文学で 89,映画で 101,種類にして延べ 164 語の異語データを得た。なお語数は word-form 方式で計測し,名詞複数形・動詞活用形・比較変化形に限って基本形へ繰り込んでいる。

重要語指定の妥当性は,石川(1998,2001b)などと同じく,カバー率とヒット率の両面から見ていくこととしたい。カバー率とは,コーパス構成語に対して,そのうちのいくつが重要語に指定されているかを示す値である。例えば,時事英語コーパスを構成する 124 語のうち,3 版は 86 語を指定しているが,この場合のカバー率は 69%となる。一方,ヒット率とは,各版の指定する重要語総数に対して,そのうちのいくつがコーパス構成語に含まれていたかを示す数値である。例えば,サンプル範囲の 3 版の指定重要語総数は 148 語であるが,時事英語コーパスに含まれていたのは,そのうちの 86 語であった。この場合のヒット率は 58%となる。

妥当性・有用性の高い重要語指定を行うためにはカバー率とヒット率の両方がバランスよく高い値でそろうことが必要である。そこで,カバー率とヒット率を合計した数値を C/H 値として算出し,重要語指定の妥当性を総合的に判断する目安としたい。例えば上例の場合

は、カバー率 69、ヒット率 58 であるから、C/H 値は 127 となる。

5.2 ジャンル別コーパス構成語彙との照合結果

以下ではまず、ジャンル別構成語彙との照合調査の結果を示す。

時事英語(124語)

Ed.	entry	hit	cover rate	hit rate	C/H score	C/H rank
3 rd	148	86	69.35	58.11	127.46	3
4 th	147	85	68.55	57.82	126.37	4
5 th	115	81	65.32	70.43	135.76	2
6 th	114	83	66.94	72.81	139.74	1

児童文学(89語)

Ed.	entry	hit	cover rate	hit rate	C/H score	C/H rank
3 rd	148	74	83.15	50.00	133.15	2
4 th	147	74	83.15	50.34	133.49	1
5 th	115	65	73.03	56.52	129.56	4
6 th	114	65	73.03	57.02	130.05	3

映画(101語)

Ed.	entry	hit	cover rate	hit rate	C/H score	C/H rank
3 rd	148	77	76.24	52.03	128.26	4
4 th	147	77	76.24	52.38	128.62	3
5 th	115	75	74.26	65.22	139.47	2
6 th	114	77	76.24	67.54	143.78	1

最初にジャンルごとの対応度について見る。石川(2001a)でも触れたように、ジャンルはその構成語彙に大きな影響を及ぼすのであるが、典型的な3ジャンルに対して、『英和中』は、どれもおよそ7割を越えるカバー率を達成している。改訂によってその数値は上下するわけであるが、あえて言えば時事英語のカバー率が他の2ジャンルに比べて低いようである。また、C/H値に即して見ると、とくに5版以降において、児童文学の値が他より落ち込んでいることが目を引く。

次に、5版改訂とジャンルとの関係について見る。『英和中』が5版改訂時に大幅な重要語数の削減を行ったことはすでに述べたとおりであるが、興味深いことに、時事英語と映画に関しては、予想されるカバー率の落ち込みはほとんど認められない。とくに映画の場合、6版は3版に対してサンプル範囲で30語以上の削減を行ったにもかかわらず、結果的に3版と同じカバー率を維持しているのである。これは、5版ないし6版で削除した重要語の多くが、映画や時事英語の構成語彙と重なっていないことを示す。だが逆に言うと、それは、時事英語・映画以外のジャンルに特有の語彙が集中的に削られたことに他ならない。児童文学のカバー率が5版改訂に伴って一挙に10ポイントも低下したのはこのためであった。これは、一面においては、最近の『英和中』が、時事英語や映画など、実践的なコミュニケーションへの対応を重視しようとしていることの反映である。だが、成人向けの韜晦な文学作品ならともかく、英米の子供が日常的に親しむ「児童」文学コーパスは、むしろ実践的コミュニケーションの一部

とみなすべきである。この点において、重要語指定の妥当性が、児童文学コーパスにおいて低下傾向にあることは憂慮すべき問題である。

最後に、C/H 値に即しつつ、3 次の改訂による全般的な妥当性の変化について概観する。時事英語と映画については、おおむね改訂のたびに数値は向上しており、いずれにおいても 6 版が最高値を挙げている。このことは、『英和中』の重要語指定の見直しが、大枠では望ましい方向に向かっていることの証左と言ってよい。

5.3 統合コーパス総構成語彙との照合結果

以上の考察を確認すべく、次に 3 つのジャンル・コーパスに出現した全 164 語に対する照合の結果を示す。

3 ジャンル全体(164 語)

Ed.	entry	hit	cover rate	hit rate	C/H score	C/H rank
3 rd	148	115	70.12	77.70	147.82	1
4 th	147	114	69.51	77.55	147.06	2
5 th	115	96	58.54	83.48	142.01	4
6 th	114	98	59.76	85.96	145.72	3

ジャンル別に見れば、5 版の重要語削減の影響は比較的小規模に留まっていたように思えたが、総合的に見るとやはりその影響は小さくない。5 版におけるカバー率の落ち込みは 10 ポイントを越えており、その低下分はヒット率の上昇でも埋め切れていない。もっとも、6 版における指定語の見直しはかなり精度の高いものであったようで、6 版ではカバー率・ヒット率共に僅かずつ改善し、C/H 値は、3 版ないし 4 版に比べて 2 ポイント減というところまで回復している。

上表をふまえるならば、ここで改めて考慮すべきはやはり 5 版の重要語削減の是非である。果たして、5 版の 7000 語という重要語の総枠は、必要な語を積み上げた結果として得られた数字であったのだろうか。重要語選定の方法が明示されていない以上、推測に頼るほかないが、もし仮に重要語数削減という方針が最初に決定され、後からそれに合わせる形で 7000 語の内容を決定したのだとすれば、その判断は再考されてしかるべきである。というのも、文部省の指導要領との整合の必要上、中高ランクの語数を大幅に削減することはやむを得ない措置であるが、一方で大学・一般という新設のランクに関しては、なんら外的な規制は存在しないのである。6 版における各種数値の改善が示すように、重要語見直しの全般的な方向性は正しいわけであるから、7000 語という枠を取り払った上で改めて指定をやり直すならば、『英和中』の重要語指定はさらに高い妥当性を達成することが期待されるのである。

5.4 現行指定の変更を検討すべき語彙

それでは、今後の重要語指定の見直しにおいては具体的にどのような点に注意を払えばよいのであろうか。以下では、コーパス総構成語彙リストと現行の 6 版の指定語を照合することで、重要語として削除および追加を検討すべき語について具体的に考えてゆきたい。

5.4.1 削除検討語

6版で重要語に指定されているもののうち、3コーパスの何れにおいても構成語となっていない語は以下の16語である。

削除検討語

abbreviate, abnormal, abode, abound, abrupt, absorption, abundance, abundant, accidental, accordingly, AD, adhere, adjective, advantageous, adverb, aeroplane

まず目に付くのは、adjectiveとadverbという文法用語である。これらは、高校ランクに指定されているが、現在の英語教育では品詞を原語で示すことは原則的に行われておらず、指定の取り消しが適当であろう。また、aeroplaneは数少ない中学ランク語の1つとなっているが、英国でも当該綴字は減少の方向にあるようであり、同じく取り消しが検討されるべきである。

一方、派生形の問題はここにも関係している。現行版の重要語には、abruptやaccidentalが入ってabruptlyやaccidentallyが入っていないわけであるが、コーパスでは逆に、abruptlyやaccidentallyの方が頻出しているのである。基本形と派生形の関係については、辞書自体の基本的な指針を明確にした上で、厳密な頻度調査を行うことによって現実の姿に近づけてゆく努力が必要であろう。

5.4.2 追加検討語

一方で、コーパス構成語でありながら現行6版で重要語となっていない語は全部で61語ある。しかしその中には映画で用いられる感嘆詞aaahや、児童文学で用いられる呪文の言葉abracadabraのような特殊語、また、特定ジャンルでしか出現しない専門性の高い語彙も含まれており、これら全てを新規重要語として追加すべきということにはならない。

一般に語彙の重要性とは、特定の語が何回用いられるかという頻度と、それがどれだけ多種類のジャンルで用いられるかという汎用度から決定されるべきものである。そこで現行の6版の重要語指定から漏れている61語のうち、コーパスで高頻度語または高汎用度語になっているものに限ってリストアップすることにした。なお高頻度語とは約400万語のコーパスでの出現回数が40回を越えたものを指し、高汎用度語とは、時事英語・児童文学・映画セリフの3ジャンルのうち2ジャンル以上で共通出現したものを指す。

前者に該当したのは13語、後者に該当したのは14語であったが、重複があるため合計では19種となる。なお下記にボードで示した語は高頻度であると同時に高汎用度であったとくに重要な語彙である

追加検討語

abandoned, abc, abortion, absorbed, **accepted**, accomplished, **accusation**, **accused**, ace, **acknowledged**, acquisition, **acting**, **activate**, activist, addict, administrator, **admitted**, adventurous, advisory

重要語への追加を検討すべき19語を概観すると、そこには現代社会を描写する時事的な

語が多いことに気が付く。accusation(告訴), acting(代理の), activist([デモなどの]運動家), administrator(行政官), abortion(中絶), addict(中毒)などはその典型である。また上記の中には、重要語指定された基本形の派生形もある。だが、acting, activist, administrator など、どれをとっても基本形からその語義・用法を完全に推測することは困難であり、やはり独自に重要語として指定されるべきであろう。

『英和中』は5版において「新しい資料により、総点検」を行ったはずであるが、3版および4版の既指定語を削減の方向で見直すことに比べると、未指定語を新たに追加の方向で検証することは未だ十分とは言えないようである。すでに述べた総枠 7000 語の再検討と同時に、この点にも今後十分な配慮が望まれるところである。

6 おわりに

我々は以上で、日本の学習英和を代表する辞書の1つである研究社『英和中』について、過去30年間の重要語指定の変遷の様子を内容・妥当性の両面から概観してきた。その結果、『英和中』の重要語指定は、各種英語資料の読解にとってある程度は有効なものであり、6版改訂に見られるように、近年ではさらに改善の方向に向かっていることが明らかとなった。しかしながら、これまでの改訂を俯瞰するならば、そこには3つの大きな問題点があるように思える。

1 点目は派生形の扱いの不統一である。例えば、同じく高頻度語である acquisition, accessible, advertising, acceptable に関して、前の2つを重要語から外し、後ろの2つをそれに加えることは、学習者をいたずらに混乱させる要因となりかねない。重要語の数え上げに関して word-form 方式と headword 方式のいずれを取るのかを明確にし、それを徹底することが強く望まれる。なおその際には、見出し語立項方針との整合を取る必要があることも併せて指摘しておきたい。

2 点目は重要語の総数についてである。3版および4版の9000語と5版以降の7000語を比べると、とくにカバー率の点で7000語では不足の感が強い。もちろん、Carroll, Davies & Richman(1971)のように、5000語で自然言語の9割をカバーできるとする先行研究も存在するわけであるが、一方で竹蓋(1982)のように、平均的日本人学生の認識語彙の上限に当たる7191語では、英米の私用手紙文の48%、科学論文要綱の26%しかカバーできないという調査結果もある。「日本人の語彙の不足は歴然である。未知語の数が多くなればなるほど文理解の困難度は加速度的に大きくなるから、日本人のリーディングを考えた場合、語彙の量はその正否にもっとも大きな影響を与える要因」であるという高梨・高橋(1987:65)の指摘を待つまでもなく、教育的側面の強い学習英和辞書の重要語指定のサイズとして果たして7000語が妥当であるのかどうか、今一度再検討することが重要である。とくに指導要領の束縛を受けない大学・一般のランクについては、積極的に指定語を増やす方向で見直しを行うべきであろう。

最後に3点目は、新語の重要語指定に関してである。調査対象範囲に限って言えば、『英和中』における指定重要語の見直しは、3版および4版ですでに指定されていた重要語の枠内で行われてきたという印象が強い。5版以降の10年間で新規に追加された重要語が administrative, adolescence, acceptable, accelerate のわずか4語であったことはこの間の激しい言語変化に対応するものとしては、いささか不足であろう。上述の2点目の問題とも

関連するが、『英和中』の重要語見直しは、すでに指定されている重要語の数を減らすことに意を砕くあまり、新語への目配りという点で必ずしも十分ではなかった。今後の改訂では、近年急速に整備の進んでいる大型コーパスなども利用して、新語についても積極的に重要語指定の対象としてゆくことが望まれよう。

冒頭でも述べたように、明確な指針が存在しない語彙学習の中身を決定する上で、学習英和辞書の責任はきわめて重い。だが、他に基準がないということは、辞書が外的な規制を受けることなく、日本人学習者にとっての重要語を一から構築してゆけるということをも意味している。『英和中』を含めた多くの辞書が互いに競い合うことで、今後、重要語をめぐる議論に新たな展望が開けてくることを期待したい。

注記

本稿は、2000年5月20日~21日に、茨城キリスト教大学で行われた日本英語教育史学会第16回全国大会での口頭発表原稿を大幅に加筆・修正したものである。

参考文献

- Caroll, J.B., P. Davies & B. Richman (1971) *Word Frequency Book* (American Heritage Publishing Company Ltd.)
- Evelyn, H. & C. Brown (1995) *Vocabulary, Semantics, and Language Education* (Cambridge University Press).
- Fries, C. C. & A.A. Traver (1950) *English Word Lists*, (The George Wahr Publishing Company) [増山節夫訳注(1958)『英語の制限単語表』(大修館書店)].
- 稲村松雄(編)(1970)『講座英語教授法第7巻 語い・連語の指導』(研究社).
- 石川慎一郎(1998)「英語コミュニケーションと語彙:大学入試用単語集の有効性の検討」『言語文化学会論集』11号(言語文化学会) pp.43-62.
- _____ (2001a)「テキスト・ジャンルと構成語彙」『KELT』16号(神戸英語教育学会) pp.3-17.
- _____ (2001b)「英和辞書における語彙重要度指定の妥当性の検証」『紀要』14-1号(静岡県立大学短期大学部) pp.1-12.
- 伊藤健三・島岡丘・村田勇三郎(1990²)『英語学大系第12巻 英語学と英語教育』(大修館書店).
- カウイー, A.P. (1984)「文法特記について」, R.R.K. ハートマン(編), 木原研三・加藤知己(訳)『辞書学 その原理と実際』(三省堂) pp.125-136.
- 小島義郎(1984)『英語辞書学入門』(三省堂).
- 村田年(1997)「英語教育における語彙制限」『言語文化論叢』3号(千葉大学外国語センター) pp.27-37.
- _____ (1999)「中・高学習指導要領の語彙数を検討する」『言語文化論叢』6号(千葉大学外国語センター) pp.173-186.
- Nation, I.S.P. (1990) *Teaching and Learning Vocabulary* (Newbury House Publishers).
- 太田垣正義(1993)『英語教育学・理論と実践の結合 語彙指導と語彙研究』(開文社出版)

株式会社).

高梨庸雄・高橋正夫(1987) 『英語リーディング指導の基礎』(研究社出版).

竹林滋・千野栄一・東信行(編)(1992) 『世界の辞書』(研究社出版).

竹蓋幸生(1981) 『コンピュータの見た現代英語 ポキャブラリーの科学 』(エデュカ株式会社).

_____ (1982) 『日本人英語の科学 その現状と明日への展望 』(研究社出版).

馬本勉(2000) 「学習指導要領『必修語』の選定に関する歴史的考察:頻度と定義可能性による必修語リストの評価」『日本英語教育史研究』15号 (日本英語教育史学会) pp.51-72.

別表

	3rd	4th	5th	6th		3rd	4th	5th	6th		3rd	4th	5th	6th
a	4	4	4	4	accommodate	3	3	1	1	addition	4	4	2	2
abandon	3	3	2	2	accommodation	3	3	1	1	additional	3	3	2	2
abate	3	3	1	0	accompaniment	3	3	0	0	address	4	4	4	4
abbey	3	3	0	0	accompany	4	4	2	2	adequate	3	4	2	2
abbot	3	3	0	0	accomplish	4	4	2	2	adhere	3	3	1	1
abbreviate	3	3	1	1	accomplished	3	3	0	0	adjacent	3	3	0	0
abdomen	3	3	0	0	accomplishment	3	3	0	1	adjective	3	3	3	3
abdominal	3	3	0	0	accord	3	3	1	1	adjoin	3	3	0	0
abhor	3	3	1	0	accordance	3	3	1	1	adjourn	3	3	1	1
abide	3	3	1	1	according	4	4	3	3	adjust	3	3	2	2
ability	3	3	3	3	accordingly	3	3	1	1	adjustment	3	3	1	1
able	4	4	4	4	account	4	4	3	3	administer	3	3	1	1
abnormal	3	3	1	1	accumulate	3	3	1	1	administration	3	3	2	2
aboard	3	3	2	2	accumulation	3	3	0	0	administrative	3	0	1	1
abode	3	3	1	1	accuracy	3	3	1	1	admirable	3	3	0	0
abolish	3	3	1	1	accurate	3	3	2	2	admiral	3	3	1	1
abolition	3	3	0	0	accurately	3	3	0	0	admiration	3	3	2	2
abominable	3	3	0	0	accused	3	3	0	0	admire	4	4	3	3
abound	3	3	1	1	accusation	3	3	0	0	admirer	3	3	0	0
about	4	4	4	4	accuse	3	3	2	2	admission	3	3	2	2
above	4	4	4	4	accustom	3	3	2	2	admit	4	4	3	3
abroad	4	4	3	3	accustomed	3	3	1	1	admonish	3	3	1	1
abrupt	3	3	1	1	ache	3	3	2	2	adolescence	0	0	1	0
abruptly	3	3	1	1	achieve	3	3	2	2	adopt	4	4	2	2
absence	3	3	3	3	achievement	3	3	1	1	adoption	3	3	0	0
absent	4	4	3	3	acid	3	3	2	2	adore	3	3	1	1
absolute	4	4	2	2	acknowledge	3	3	1	1	adorn	3	3	1	1
absolutely	3	3	2	2	acknowledgement	3	3	0	0	adult	3	3	2	2
absorb	3	3	2	2	acorn	3	3	0	0	advance	4	4	2	2
absorption	3	3	1	1	acquaint	3	3	1	1	advanced	3	3	1	1
abstract	3	3	2	2	acquaintance	3	3	1	1	advancement	3	3	0	0
absurd	3	3	1	1	acquire	3	3	2	2	advantage	4	4	3	3
absurdity	3	3	0	0	acquisition	3	3	0	0	advantageous	3	3	1	1
abundance	3	3	1	1	acquit	3	3	0	0	advent	3	3	0	0
abundant	3	3	1	1	acre	3	3	2	2	adventure	4	4	3	3
abuse	3	3	1	1	across	4	4	4	4	adventurer	3	3	0	0
abyss	3	3	0	0	act	4	4	3	3	adventurous	3	3	0	0
academic	3	3	2	2	acting	3	3	0	0	adverb	3	3	3	3
academy	3	3	1	1	action	4	4	3	3	adversary	3	3	0	0
accelerate	0	0	0	1	active	4	4	3	3	adverse	3	3	0	0
accent	3	3	3	3	activity	4	4	3	3	adversity	3	3	1	0
accept	4	4	3	3	actor	3	3	2	2	advertis(/z)e	3	3	2	2
acceptable	0	0	2	2	actress	3	3	2	2	advertis(/z)ement	3	3	2	2
acceptance	3	3	1	1	actual	3	3	3	3	advertising	3	3	0	1
access	3	3	1	1	actually	4	4	3	3	advice	4	3	3	3
accessible	3	3	2	0	acute	3	3	1	1	advise	3	3	3	3
accession	3	3	0	0	ad	0	0	2	2	adviser	3	3	0	1
accessory(sary)	3	3	1	1	AD	3	3	2	2	advocate	3	3	1	1
accident	4	4	3	3	adapt	3	3	2	2	aerial	3	3	1	1
accidental	3	3	1	1	adaptation	3	3	0	0	aeroplane	4	4	4	4
acclaim	3	3	0	0	add	4	4	4	4					